

受講番号 19096 学校名 窪川中学校 氏名 岩崎 祥香

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 3年生 生徒数 28名
科目名 3年生 単位数(授業時数) 3時間 使用教科書名 NEW HORIZON 3 (東京書籍)

クラスの様子・特徴

全体的には授業に集中して取り組むことができる。一方では特別な支援が必要な生徒や、他人とコミュニケーションを取ることを苦手とする生徒もいる。英語に対する学習意欲はあるが、苦手意識を持っている生徒もいる。生徒同士の関わり合いが必要だと感じる。

問題の確定

英語に対する興味・関心はあるが、他者との関わり合いを苦手とするため自信を持って英語で表現することに慣れない傾向にある。

予備調査

A 授業の観察

生徒自身から、他者との関わりを持って授業に取り組もうとする姿勢はあまり見られないが、こちらがグループの体系を指示すると、比較的教え合い、学び合いができる。しかしグループによって意欲の差があることや、人間関係が築きにくいグループがある。

B 生徒による授業評価

「話すこと」における活動に対して、肯定的に授業を評価している生徒が多い。また、グループ間による学習形態に対しても、比較的楽しんで受けることが出来ているといった評価が多い。しかし、グループごとに温度差がある現実がある。

C 学力データ

ALTと一対一で話す活動では、「声の大きさ」などの項目で、点数が下がる生徒が多い。ペアでの話す活動では、それらの項目が個人での活動時よりも点数が上がっている。特に英語を苦手とする生徒に関して、点数が大きく上回っている傾向がみられた。

リサーチ・クエスト

生徒同士の関わり合いが出来るような授業形態をつくり、教え合い、学び合いを深める中で、「話すこと」における表現力を高めるにはどのような指導をすればよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

グループの班をつくり、生徒同士の関わり合いがしやすいようにすれば、生徒間の信頼関係がうまれるであろう。

実践1

男子2名、女子2名の4名でグループをつくり、市規模になるようにグループを組んだ。会話が交差するようにグループ体系をつくることで、生徒同士の関わり合いがしやすいような環境づくりをした。毎回の授業で必ず1～2回のペースでグループの体系をつくるようにし、いつでも質問や意見交換ができるようにした。

検証1

グループ体系にすると自然と会話が交差し、生徒同士の関わり合いが自然に取れるようになった。分からないことがあれば、助言を求めることができ、生徒同士の教え合い、助け合いがスムーズにできるようになった。男女の枠を超えて、会話ができるようになると、学級の雰囲気もよくなってきた。前半は、学級の雰囲気や、グループ内の人間関係によって、話し合いがスムーズに行かないという課題もあったが、少しずつ改善されている。

仮説2

「話すこと」における表現力を身につけるためのテストをペアで行うことによって、個人で行うものよりも話す力が向上するであろう。

実践2

以前は生徒一人ずつ行っていた表現力をはかるテストをペアで行うスキットテストにした。教科書のSpeaking Plusのページを題材にし、ペアでの自然な会話ができるように促した。また、本文の内容を生徒自身でオリジナルの文に変更したり、ジェスチャーをつけるというルールを設け、生徒間で話し合いをしながら、表現のアイデアを引き出すようにした。月1回のペースで行うようにした。

検証2

ペアで行うことによって、生徒たちに安心感が生まれ自信を持ってテストに臨むことができていた。また、ただ単に暗記をして発表するというのではなく、各ペアがアイデアを出し合い、独自の内容に変更して発表することで、教科書の内容がより身近で実践的なものを感じられている。

仮説3

教科書の本文やまとまった文を暗記できるまで練習を繰り返し行えば、「話すこと」における表現力が身に付くだろう。

実践3

表現力をはかるスキットテストにおいて、本番までに十分に練習時間を取るようにした。教科書の本文や、まとまった文を視覚的、聴覚的にインプットし、自然とその表現が出てくるようになるまで指導をした。また、暗記をする作業を授業の中で完璧になるまで指導をすることで、暗記をすることへの負担を均等にするようにした。生徒同士の教え合いの場を大切にしながら、生徒に自信を持たせることを中心に進めていった。

検証3

内容を完全に暗記できるようになるまでの練習方法を飽きさせないように工夫しながら進めていった結果、ほとんどの生徒が授業中に暗記をすることができた。リズムや英語のイントネーションに重点を置くことで、感覚的に英語を暗記することができた。グループ体系になった時に分からない所をグループ内で話し合いをする時間を設けた結果、生徒同士の助け合いが見られた。

研究の成果

教師側が生徒たちに一番適している環境をつくるのが、生徒にとってどれだけ大切かということである。一学期当初は、生徒たちの関わり合いの薄さに違和感を感じていたが、教師側から関わる機会や環境をつくることで、生徒たちは自然と適応していく。そして、期待以上に生徒は変化をするということを、身をもって体験することができたように思う。英語の表現力をつけるには、一番に生徒に自信を持たせるということだと思う。そして、頑張って表現をしたことに対して、教師側が十分に評価をすれば、生徒は抵抗感を持たずにのびのびと表現することができるということを実感できた。

今後の授業改善の課題

生徒同士の関わり合いを中心に本研究を進めていったため、実践的な英語の表現力を伸ばすことが十分に行えなかったことが課題である。しかし、生徒同士の信頼関係や間違いを恐れずに授業に臨む姿勢を築くことができたので、今後はさらに実践的な英語の表現力を身につけられるような教材研究をしていきたい。また、グループ体系をさらに利用し、生徒の関わり合いを深められるような授業実践をしていきたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話 0880-22-0020